

新島 襄の言葉

木村 良己(高等学校教諭)

1864(元治元)年3月10日、脱国へのスタートともいうべき江戸からの脱出、函館への出発直前に「感算理説」の余白に記した漢詩である。

一連の流れは急を要していた。この漢詩を余白に書き留める3日前の3月7日、読んでいた航海書の中で理解不明な箇所の説明を聞くべく、中浜万次郎を訪ねるため外出。「航海書を携えて、いつものようにガラガラと高下駄を鳴らして駿河台を下ってきた」(『函館紀行』)。その途上、友人と出合い「快風丸」が函館に向かうとの情報を耳にする。事態は一変! 函館出航が3月12日であるから、グッドニュースを耳にしてから中4日、切迫感が漂う。いつもと変わらぬ日常への稲妻のような閃き。快風丸への乗船許可、藩主の許可、家族の了解、荷物整理…、脱国へと繋がる道程は慌ただしいが周到である。

志の大きさ、壮大な人物像が注目されがちだが、着の身着のまま、思い煩いを持つ一人の「小さな存在」であることを自覚し、切迫した時間的経過の中にも、周到な準備に励む緻密さをも垣間見る一連の動きである。

この言葉は、永眠の年の正月に詠んだ漢詩にある「鶏鳴」と共に、「鶏鳴館／桑志館」として岩倉校地・教室棟にその名を留め、「脱国140年」にあたる今もお、生徒たちを包み、「盛んな志」を育んでいる。

二襲弊袍三尺劔
回頭世事思悠悠
男兒自有蓬桑志
不涉五洲都不休

二 襲弊袍三尺劔 回頭世事思悠悠
男兒自有蓬桑志 不涉五洲都不休

『新島襄全集』一卷339頁

二重ねの古びた着物と三尺の刀だけを身につけ、この世のさまざまに思い煩いが頭の中をめぐるが、自分には蓬(よもぎ)や桑のような盛んな志がある。五つの大陸をまたにかけて歩き終えるまでは休むわけにはいかないのだ

〔教材・新島襄〕21頁